

奈良市教育ビジョン懇話会(平成24年度第3回) 会議録

1 日時 平成25年2月28日(木) 午前10時～午前12時

2 場所 奈良市役所 北棟6階 第22会議室

3 出席者

【委員】重松敬一委員、岡毅委員、本山方子委員、木南千枝委員、畑中康宣委員、奥田美代子委員、上田益世委員、福山晴美委員、竹原康彦委員、中西拓也委員、荒木美久子委員、木寅葉津子委員、中尾靖委員、阪本敏夫委員、出原和美委員
(欠席 大西昇委員、上山勝己委員、本車田達郎委員、檜垣志保委員)

【市職員】教育総務部長、学校教育部長、教育総務部次長、教育総務部参事(教育政策課長事務取扱)、教育総務部参事(中央図書館長事務取扱)、子ども未来部参事、子ども政策課長、地域教育課長、学務課長、保健給食課長、教育センター教育支援課長、教育センター教育相談課長

【事務局】教育政策課職員

4 会議事項

- (1) 座長あいさつ
- (2) 事務局説明
 - 奈良市教育ビジョン後期計画策定に向けて
 - ・ 複数年評価の総括について
 - ・ 評価方法等について
- (3) 意見交換
- (4) その他
 - ※全て公開で審議。(傍聴人1人)

5 配布資料

- 奈良市教育ビジョンの施策評価（案） 複数年評価（H21～24）
- 後期計画 奈良市教育ビジョンの評価について

6 議事の要旨

(1) 座長あいさつ

- 重松座長が、開会にあたってあいさつ。

重松座長☞ 教育ビジョン後期計画策定に向けて、これまで何度かワーキンググループも開かれているが、本日は式次第に沿って協議事項が大きく2つある。特に、複数年評価について及び後期計画の評価について審議頂きたい。

(2) 事務局説明

- 事務局が、奈良市教育ビジョン後期計画策定に向けて（複数年評価の総括等について）説明。（パワーポイント資料）

➤ 後期計画策定に向けて以下の3つの視点から重点的に検討している。

- ① 全国学力・学習状況調査の結果
- ② 教育ビジョンの見直しにかかるアンケート調査の結果
- ③ 教育ビジョン前期計画の総括

第2回懇話会では「全国学力・学習状況調査の結果」及び「教育ビジョンの見直しにかかるアンケート調査の結果」について審議して頂いた。本日は「教育ビジョン前期計画の総括」についてご意見を頂きたい。

➤ 配布資料「奈良市教育ビジョンの施策評価（案）複数年評価（H21～24年度）」について。冊子後方には参考資料として平成21～23年度の単年度評価と平成21～24年度の複数年評価を併せて掲載した。複数年評価の見方について説明する。

・施策のねらい【子ども像】欄

これまでは教育ビジョンとしてめざす子ども像を掲げながら、各施策がどの子ども像に結びついているのか、また施策のねらいが明確になっていなかったことをふまえ、施策のねらいとめざす子ども像「知・徳・体・夢・誇」のどこと繋がっているのかを示した。

・アンケート結果欄

奈良市教育ビジョン見直しに係るアンケート調査の結果から、どの

施策を充実させるべきかという教員の結果と、保護者に対する教育ビジョンの施策の認知度の結果を表した。

・前期計画の各事業評価欄

複数年の施策に対する評価を4段階で示した。

・アンケート結果等からの考察欄

教育政策課にて総合的な観点から考察した結果を示した。

・成果、課題（子どもの姿の視点から）欄

後期計画ではめざす子ども像にどれだけ近づけたかという到達度評価を検討していることも考え、子どもの視点に立った現状の成果と課題を示した。

・今後の方向性（施策レベルから）欄

施策の視点に立った今後の方向性を示している。

- 複数年評価の内訳について説明する。112施策のうち2施策が廃止となり、現在は110施策となっている。基本目標1～5のうち、評価が4（できた）または3（ほぼできた）というプラス評価となっている施策が96%を占めており、基本目標はほぼ達成できたと言える。しかし、基本目標2～5で1施策ずつ2（あまりできていない）という評価がついている。詳細について説明する。

・基本目標2「規範意識の育成」

児童生徒の問題行動等の実態から、後期計画に向けては規範意識の醸成の効果的な方法についてさらに検討する必要がある。

・基本目標3「通級指導教室の機能拡充と充実」

通級指導教室のニーズが高い状況にありながら、通級指導教室の小中学校における増設や中学校における新設ができていないため、今後に向けても関係課と連携を図りながら奈良県に要望していく必要がある。

・基本目標4「安全・安心な施設環境の整備」

学校施設の老朽化に伴い、危険度の高い改修必要箇所が増加しているため今後に向けても予算確保に努め、子どもたちが安全安心な学校園生活を送れるよう施設環境の整備を図る必要がある。

・基本目標5「情報通信を活用したボランティアネットワークによるコーディネーター支援」

今後に向けては「学校園のホームページ」を活用し、情報提供と交換の場としていく必要がある。

- 後期計画の評価方法について説明する。前期計画の評価報告書では、27施策の毎年度の目標と進捗状況、次年度に向けての目標をまとめ、達成度を4段階評価で示した。また、学校現場の教員が活用し

やすい評価報告書とするため、達成度評価だけでなく、各27施策における様々な「学校の取組事例や様子」を紹介した。しかし、112事業は多すぎる、教育委員会の施策評価と重複するところがある、めざす子ども像との繋がりが分からない、教育ビジョンが学校現場に浸透していない等の課題が挙げられた。これらを解決した先に望む未来像は、施策の結びつきを構造化し、子どもの姿が見えるわかりやすい評価とすることで、学校現場が教育ビジョンについて理解した上で日々の教育活動にあたることである。これを実現する為に、次の2点の改善策を提案する。

① 112事業を主な重点事業のみに絞り込む

27施策（112事業）を整理し、重点事業の評価を実施する。ただし、教育ビジョンに挙げない事業を廃止するというわけではない。

② 子どもの視点の測定目標を立て、教員が評価する

指導主事の事業評価とは別に、学校現場の子どもがどれだけめざす子ども像に近づけたかという到達度評価を実施する。

➤ 後期計画の評価方法について詳しく説明する。後期計画は、次の2点から評価を実施する。

① 子ども像の到達度評価

教員が評価を行う。5つのめざす子ども像にどれだけ迫ることができたかを子どもの実態に即して評価する。

② 事業の達成度評価

事務局が評価を行う。子ども像の到達度評価の結果をふまえて、担当課が施策及び事業を評価する。

➤ 子ども像の到達度評価の方法について説明する。学校現場の教員に、評価シートに沿って実施してもらおう。シートには5つのめざす子ども像に基づき、特徴的に表れる行動例をそれぞれ5つずつ挙げている。教員が担当の学級の子どもたちがどれだけ行動例に該当しているかを入力すると、担当の学級の子どもたちがめざす子ども像にどれだけ近づいているかがグラフで表れる。これらのデータを学年ごと、学校ごとに集計すると、本市の子どもの実態と教育ビジョンの施策の到達度が浮かび上がる。

➤ これらの評価方法を実施するメリットとしては、教員がビジョンの実践者であり評価者でもある為内容や本質を理解し、実践に生かせること、また、教育委員会と学校現場の情報距離が近くなる等である。

➤ 今後の評価について、平成24年度、25年度はまだ前期計画の期

間である。平成24年は従来の単年度評価に加え、複数年評価も実施していることを考慮し、単年度評価報告書には「学校等の様子」「紹介したい取組事例」の掲載は省略する。平成25年度は従来の単年度評価を実施するが、翌26年度より後期計画となり新しい施策、事業となる為、「次年度の目標・改善点」を省略する。平成26年度は施策や事業の達成度評価と、子どもの視点に立った到達度評価の2点から評価を実施する。達成度評価については、教育委員会の施策評価に極力合わせた新しいレイアウトにて評価を実施する。

- ▶ 前回報告した教育ビジョンアンケートの自由表記欄の結果について追加で報告する。全部で1500ほどの意見があった。カウント数については、1人が2項目について意見を記入していた場合2として集計している。自由表記を記入している割合は就学前保護者が74%、小学校保護者が27%、中学校保護者が21%、高校保護者が18%となっている。年齢の若い子どもを持つ親ほど教育に強い思いを持っていることが分かる。教員については、どの校種も一律35%程度と、同じくらいの割合となっている。
- ▶ これらの意見を、教育ビジョンの各施策と、アンケートへの意見、教育予算という項目に分類して集計した。この中で特に意見が多かった項目は、「教職員の資質・能力向上の推進」「幼児教育の推進」「生徒指導や心のケアなどの支援体制の充実」だった。このような結果となった要因として、幼児教育については、3才児保育を希望する保護者の意見が圧倒的に多かった。生徒指導については、このアンケートを実施したのが平成24年9月であり、丁度大津のいじめ事件が取り上げられていた時期であったことから、関心が高くなったと思われる。それ以外の項目については、教員から「30人学級」の推進の声が上がっていたこと、「体力の向上と健康教育の推進」で中学校給食を希望する声が多かったこと、切り詰められている「教育予算」をもっと増やして欲しいというような内容があった。
- ▶ 各施策等に分類した意見をさらに推進意見・反対意見に分けた。しかし、文面から単純に推進を読み取れるものだけでなく、厳しい意見もあった。一例として、「教職員の資質・能力向上の推進」は推進意見が多いグラフとなっているが、実際の意見として「教員はもっと頑張ってほしい」といったものもあり、つまるところ教員の資質・能力を向上してほしいという推進意見として捉えた。それをふまえた上で多かった意見として、幼児教育については預かり保育や3才児保育への要望、教職員の資質・能力の向上については「もっとレベルを上げてほしい」「塾に頼らないといけないのはおかしい」とい

った意見もあった。それに対して、「30人学級」や「小中一貫教育」「健康教育（特に中学校給食に対して）」について推進に懐疑的な意見があった。

- 集計したグラフに表れない意見として、教員が多忙であるという意見も多かった。新学習指導要領の対応、保護者への対応、事務作業等に追われているという内容があった。

(3) 意見交換

- 奈良市教育ビジョン後期計画策定に向けて（複数年評価の総括等について）、委員が意見交換。

重松座長☞ 今、事務局から3点について説明があった。1点目は教育ビジョンの施策評価（案）の複数年評価について5つの基本目標を中心にした内容説明、2点目は後期計画について評価をする際に追加する工夫についての説明、3点目は教育ビジョンのアンケートとして市民の皆様から1500件という記述意見を頂き、項目別の簡単な内容説明があった。これまでは情報教育については非常に低い評価を受けていたが、この度校務用、情報用、教育用として各校にパソコンが設置され、情報システムが整備された。これを前提として、これまでの評価は教育委員会事務局が中心となって施策評価を実施してきたが、今後は教員の方々にも評価に加わって頂き、教員の当事者意識や、教育実践と教育ビジョンがより密にフィードバックできる方向性で迫っていける工夫を提案して頂いた。奈良市のめざす子ども像を「知・徳・体・夢・誇」という一文字で簡単に表現しているが、これらのめざす子ども像と教育の性格や方向性をより明確に検討できないかというところを1つの視点として持つて頂いた上で忌憚ないご意見、ご質問を頂きたい。

竹原委員☞ 各施策のねらいについてめざす子ども像の「知・徳・体・夢・誇」に“○”もしくは“◎”を付けて表して頂いているが、本当にこれで良いのか。また、どれにも丸がついていない施策についてはどれかに当てはまらなかったのか。もし該当しないなら、その施策は方向性がずれていたのではないかと感じるが、どう検討すべきか。

重松座長☞ “◎”を主として、“○”も複数に付ける可能性も考慮しながら検討しているが、それ自身が本当にターゲットとして良いのかという問題もある。基本的にはこれについては指導主事に付けて頂いているの

だが、そのあたりの説明をお願いしたい。

→ 【教育総務部参事（教育政策課長事務取扱）】 こちらのビジョン懇話会に提案する資料については、準備会というものを開催し、各課の代表に出席頂いて検討している。そこで、各施策がどのめざす子ども像に結びついているのかを検討した。当初は最も結びつきの強い子ども像一点に絞ろうとしたが、やはりどうしても絞りきれないものもあった為、主となるものを“◎”、次点については“○”として表記した。しかし、教員の資質・能力向上の施策については主となるものを絞りきれず、全てに“○”を付けざるを得ないという結論に、準備会出席者全員の意見が一致した。また、結果的にどこにも“○”がついていない「学校評議員制度」等の施策については、めざす子ども像に結びつけられないわけではないが、半ば無理やりになってしまうということで結びつけることはできなかった。ここで示しているものについては準備会での検討結果であるので、何か意見等があれば伺いたい。

重松座長☞ あくまで出来るだけ焦点化を図ろうとした上で、“○”が付いていないという説明を頂いた。この施策は「夢」だろう「誇」だろうといったご意見があれば後日にでもご意見を伺いたい。他にないか。

木南委員☞ 1-④「幼小連携・小中一貫教育の推進」の施策のねらいについて、「学びの連続による学力向上や、生徒指導の在り方について的手法や情報の共有により不登校生徒の減少を図る」とあるが、幼小連携・小中一貫教育は不登校生徒の為の施策なのかという違和感がある。幼小連携・小中一貫は幼小中の落差を軽減してよりスムーズに成長できるようにという目的だったが、不登校生徒の減少という焦点化をしてしまうと、それだけの為に幼小連携・小中一貫を行うのかという違和感が出てくる為、表現の工夫が必要だと思う。そうでないと、それ以降の記載とが繋がらない。

重松座長☞ その施策に関わって、具体的な数値が減ることは望ましいが、それだけに焦点を絞っているわけではないだろうという所で、文言上の表現も見直して頂きたい。

阪本委員☞ 先ほど不登校の意見が挙がったが、連携することで不登校がなくなるわけではないと思う。他の施策にて子どもの自尊感情や自己肯定感を高めるという内容があるが、それらを各学校で行うことによって不

登校がなくなるのではないか。教員が幼児期にこういう接し方をすれば小学校でも過ごしやすかった等の連携を行うことで子どもたちが自己主張しやすい環境ができ、自尊感情や自己肯定感が高まるという意味で連携を行うことは良いが、それを直接不登校生徒の減少に結びつけるのはいかがなものか。もう1点、特別支援教育について通級指導教室の事業が2という評価となっている。奈良市としても県へ強い要望を出して頂いていると伺っている。指導員の必要な学校に対して市から、昨年度は週8時間だったのが今年度は週10時間に増やして派遣して頂いているが、それでも来年度は通級指導の必要な生徒が増え、待機が出る状況になってきている。教員の配置については県の領域なので致し方ないが、他市では市から担当をつけることで翌年県から配置を受けられた例もあることを考慮して検討して頂きたい。また、先ほどのアンケートで教員の資質・能力の向上という話があったが、学校は今本当に多忙になっている。どこの学校でも、朝8時に登校し、教職員会議が終われば、次に顔を合わせる頃にはもう午後5時になっているという状況が増えてきている。現場ではベテラン教員がどんどん抜けていき若返りが起こっている。ベテラン教員は経験豊富であるのでゆとりを持って生徒と接することができるが、若手教員は経験年数が浅い為に生徒に接するノウハウがまだ少ない。そういった時に、教員同士で伝え合う横の繋がり時間が本当に少ない。教員の資質向上は大切だと思うが、教育センターの研修以外のところで、どうやってノウハウ等について話し合う時間を生み出せるかが課題になっている。

重松座長☞ 積極的に推進して頂きたい施策は、県との兼ね合いもあるけれどもできるだけ改善を図る努力をお願いしたい。教員に関わるものについては、OJT (On the Job Training) によりその場で研修を行った方が効果的であるが、教育センターとの連携をとりながら若手教員の育成を行っている。しかし、それを越えたニーズがあることにも目を向けて現状を把握する必要があるという指摘を頂いた。他にはいかがか。

福山委員☞ 5-③地域ネットワークの拡大とコーディネーター研修の推進について、施策のねらいに「子どもに夢を運ぶコーディネーターを育成する」とあるが、市が実施している研修に子どもに夢を運ぶ研修があったのか疑問である。小学校や中学校がどのような組織であるべきかといった研修は何度も実施されているが、放課後子ども教室実施1年目の学校と6年目の学校では温度差がある。「子どもに夢を運ぶコーディネーターを育成する」という目標があるので、更にそういったコーディネ

ーターが育つような研修を行ってほしい。「情報通信を活用したボランティアネットワークによるコーディネーター支援」事業については、ボランティアは高齢の方が多く、パソコンに対応できる方が少ないという点もあることから、2という評価は納得できる。それから、教員の資質・能力の向上について、私達もたまたま授業の様子を見たりするが、本当に今の教員は大変だと身に染みて感じている。夏休みや冬休みが少なくなると、研修や教員の心の休養の時間が短くなっているのではないかと思う。一週間休むだけでも子どもたちとまた新鮮な気持ちで向き合うことができるので、時間を確保することで教員の心の余裕をもって教育の質の向上を図って頂き、充実した研修に充てて頂きたい。

木南委員 ☞ 2-①「道德教育の充実」に対して施策のねらいが「子どもたちの豊かな心や、規範意識を育む」となっているが、奈良市の子どもたちの規範意識の低さが大きなテーマとなっている。ここでは道德教育の内容充実や指導方法について強調されているが、何故子どもたちの規範意識が育たないのかを考えると、人間関係が希薄になっていることが原因ではないか。道德教育をしてもそれを受け入れる器が育っておらず、子どもたちの学び取る力が弱まっていることを考慮しなければ、教えるだけでは解決しない問題だと思う。育んでいかなければならない力、それは生まれてから就学前までの家庭での人間関係がベースとなっているが、その家庭でなかなか子どもと向き合う時間や関われる人数が減ってきており、子どもが人と接する体験がしにくくなってきている。子どもたちが適切な人間関係を築くスキルを身に付けなければ、いくら学校で道德教育の手法を工夫してもざるの様に抜けてしまう。そういったことを、直接子どもたちに関わる先生方に理解してもらえるような研修と、子どもたちがスキルを磨く為にどう接して、どう声掛けをしてあげればよいかといった指導を保護者に対しても行っていく必要がある。昔であれば、そういった伝授の役割を地域の方々が担っていたが、今ではそれがごっそり抜けおちている。私は臨床心理士として問題を抱えた子どものケース会議というものに参加しているが、一例として、ごめんなさいが言えない子どもの話がよく挙がる。いけない行為をしたことに対して注意をしても、その子どもはしらを切って認めようとしなない。それは頑固だとか底意地が悪いということではなく、悪いことをしたということを受け入れるだけの自尊感情が育っていない為、それを認めると立つ瀬がなくなってしまうので頑として認めようとしなないのではないかと話すと、子どもに接している先生方は非常に納得なさる。自尊感情の低さと情緒の未熟さが、中学生にしても、その反応は幼稚園児ではないのか

と思うような場面が頻繁にある。いじめや不登校など、問題を抱えている子どもだけではなくて、今を生きている全員が自尊感情の低さと、自信の無さと、情緒的な未熟さを抱えているのではないかと思う。ケース会議に参加する度に、「クラス内で該当する子どもがたくさんいる。とてもためになる話だった」というフィードバックを頂く。つまり、子どもに接する大人が、子どもの自尊感情を育てていかなければいけないことや年齢相応の情緒を育まなければならない。そのためのアプローチや子どもへの接し方1つで成長に繋がるということを、幼稚園や小学校などの比較的早い段階で保護者に伝えていく。昔は地域の方々から教えて頂いていたのだが、それに代わる場を設けたり、自尊感情の低さに問題があるという視点を教員が学ぶような研修をしっかりと行った上でないと、道徳教育が浸透しないのではないか。今までの教育ビジョンはそこが抜けていたので盛り込むよう検討頂きたい。

重松座長☞ 視点の欠落等々についてご指摘いただいた。学校を支える社会、家庭との連携と言っても、その実態は考えている以上に山積する。このような問題点も教育ビジョンに加味出来ないのか、また、先生方にどう意識してもらおうかということで教育ビジョンの評価入力フォームを提案していただいたが、評価項目がここに挙がっているだけで問題ないのか。評価基準が「よく見られる」「たまに見られる」では曖昧なので、「80%の子どもに見られる」等のある程度客観的に評価できるような示し方も必要ではないか。情報システム化により設置されたパソコンを用いて、教員の多忙さも考慮しつつ評価方法を検討頂きたい。

荒木委員☞ 4-①「学校評議員制度の充実」でのめざす子ども像は“○”が付いていないのに4-②「学校評価の充実」には全てに“○”が付いている。学校評価は学校内で行われるが、学校関係者の評価についても同じようなものなのではないか。該当しないのであれば施策の廃止も考えられるが、学校評議員制度を廃止することはない為、今後どういった形にするのか。1500の自由記述意見の累計化には感謝する。この分析効果を活かしていく為には、反対意見から課題解決策が見えるのではないかと思う。最近アンケートによって評価されることも多いが、アンケートを記入してもあまり改善されないといった声もある。この自由記述の結果をどのように返していくのが重要。教員による教育ビジョンの評価も同様に、忙しい中で評価を行っているのだから、奈良市の子どもたちが良くなるように反映させて頂きたい。

重松座長☞ PDCAと言われるように、基本的には評価は終わりではなくスタートになるので、結果がうまく流れるよう想定した上で評価を工夫する必要があるというご指摘だった。他にないか。

福山委員☞ 教育ビジョンの評価入力フォームは教員だけが行うのか教えて頂きたい。

重松座長☞ 教員が子どもたちの様子を見て教育ビジョンの評価を行う。

福山委員☞ これを保護者にも配布し見てもらえば、子どもを育てるための基準を知ることができるのではないか。親もめざす子ども像を知って、自分の子どもを客観的に見る良い機会になる。学校に提出するとなると、子どもの評価に関わるかもしれないという意識が働くかもしれないが、めやすがあるということを知り、子育てを行う1つの指針として良い方向に向かうのではと思う。

重松座長☞ 今後、評価の観点が変わることで、後期に向けてパンフレット等も作成されると思うので、市民に知らせたり、参加していただくかどうかなども検討していきたい。

木寅委員☞ アンケートの自由記述について、就学前保護者の意見が多いと伺ったが、幼稚園の現場でもアンケートを行ったり、行事などの教育内容について評価をして頂く際に様々な意見を書いたり、園に話しに来て下さる方が多く、とても関心が高い。「奈良市幼保再編基本計画」というものが策定され、保護者にも目を通して頂くよう告知しているが、長い文面にも関わらず早速熱心に目を通しに来られる保護者もいらっしゃる。「保育園は生まれ変わります」「魅力ある教育保育の実施」「保育者の資質・能力向上」という言葉に非常に関心を持っておられる為、現場の職員が内容を理解し、返答ができる力が必要になっている。これについては子ども未来部より研修会を開催して頂いており、現場の職員に情報を共有し、方向性について保護者へ伝えるよう努める必要がある。3-④「幼児教育の充実」施策内の「保育内容の評価指標の設定と研究」という事業について、平成21年度、22年度、23年度が1, 2, 3と上昇してきた上で今年度は3という評価を頂いている。評価指標の設定については現場や評価者にとっても分かりやすいものにしていくことが大切であると認識している。そのための資質向上に繋がるが、子どもの姿や成長が分かるような評価になるために、職員が子どもの姿を読

み取る力を付ける為に、公開保育等に取り組んでいる。大学の先生の指導助言を取り入れながら、保育者の力量を高めていくことに力を入れていくことで、今後の評価向上に繋がればと思う。同施策内の「幼稚園の情報化の推進とホームページの充実」の事業について4という良い評価を頂いているが、実際教職員は多忙であり、割り当てられている校務用パソコン1台に対して7人が共用している。ホームページを作成し、更新して充実させている一方で、現場でのネットワーク化に関してはまだまだ課題が残っている状況である。

重松座長☞ 幼保再編については来月中ごろから実施計画についてパブリックコメントの募集が開始されるが、そちらについても各園にて保護者へ通知して頂ければと思う。それらとの兼ね合いも併せて、教育ビジョンが全体的なバックボーンとなればと思う。

上田委員☞ 先ほどから挙がっているめざす子ども像の「知・徳・体・夢・誇」についてはそれ以外の項目を付け加えても良いのではないかと思います。例えば、1-①「世界遺産学習の充実」内の事業にESD（持続発展教育）とあるように、「誇」に収束するだけでなく発展させていくことも大きな目標となる。それでなければ、これ以上進まない、もしかしたら終わってしまうのではないかという考え方になりかねない。そういう点では、それ以外の要素として該当するかもしれないことを考慮しないと、何にも当てはまらないというのはおかしいと思う。その下のアンケート結果欄の、教員の必要度と保護者の認知度を並べて記載するのはいかなものか。施策によっては、認知度は高いのに必要度が低くなっているものもあり、保護者は関心を持っているのに教員は知らないのかという思いを持たせてしまう恐れがある。この部分の記載は工夫しなければならぬだろう。あと、施策ごとに事業平均評価が出ていたが、2という評価が付いているものに関しては抜本的に対策を打たなければ、評価をしている意味がないのではないかと。何故評価が2のままなのか、どうすれば改善できるのか。例えば、耐震化についても徐々に進んでいるものの、もっと早く進めなければならないという問題もある。2に甘んじているという表現は適切でないかもしれないが、2の評価については特に重点的に対策を考えなければならないのではないかと。また、学校教員は多忙というが、先日の新聞より大阪では週6日制を復帰させるという意向だが、奈良市としてはどう考えているのか。現実として、私立の学校はほぼ土曜にも授業を行っている。実際に土曜に授業がある場合、教員の負荷がどうなるのか分からないが、今後の課題になると思われる。

岡委員☞ アンケートの自由記述より教員の資質・能力の向上が求められている一方で、施策評価の4-③「教職員の資質・能力向上の推進」では高い評価が付いている。施策としては実施したが、自由記述から見ると十分に浸透はしていない。この評価のギャップをどう埋めていくのかは後期の課題であり、教員自身が評価を行うことがギャップを埋める1つのツールになると思われる。後期に向けて、内容と共に評価の方法についても検討して頂ければと思う。

出原委員☞ 2-④「幼・小・中・高等学校間の連携」や1-④「幼小連携・小中一貫教育の推進」の施策のねらいに「学びの連続性」「学力向上」という言葉が使われているのにめざす子ども像は「知」が選択されていないのはおかしいと感じた。やはりめざす子ども像を選択するというのは難しいし、かえって誤解される面もあるのではないかと思う。学力格差は低学年から始まっており、小1プロブレムがある。これらの問題を解決する為に幼小接続期のカリキュラムをどうするのか、そこに幼小連携の重要性があるという話を聞いた。質の高い教育を実施する為にも、幼小連携は学力向上に繋がるということを教職員に理解してもらえよう伝えて頂きたい。教職員の資質・能力向上についても、若手の教員にどう教えるのかということが日々の課題となっている。最近では、3年目に学年主任、5年目には次席といった重責を任され、若手の教員にとって過酷な環境となってきている。しかし、我々が当然と思っている事柄から教えていかなければならないが、それが子どもを見抜く力やいじめを捉える感性を磨くことにも繋がるので、「徳」の要素も備えていると思う。

本山委員☞ まず、この施策のねらいという項目がどういった経緯で加えられたのかをお聞きしたい。これまでの懇話会で個別の施策についてのねらいは検討されていなかったように思う。また、奈良市教育ビジョンに記載されていない文言やまったく触れられていなかったねらいが挙がってきている。委員の方々からこれほど疑問や指摘が挙がっているということは、書き方自体にも粗密のばらつき、不統一感があり、違和感があって当然だろう。また、めざす子ども像についても、横並びにして比較検討の上、5項目のバランスが悪い等の問題はなかったのか。つまり、根本的に施策のねらいと子ども像についてはビジョンに関わる為大きな問題ではないかと思われる。それから、「アンケート結果等からの考察」の項目は先ほどから挙げられている違和感の元になっているかと思

う。単純にアンケート結果と事業評価の結果を結びつけるのは難しい。教員の必要度が低いことが問題であるのかどうか。例えば、必要度が低くなっていた場合、十分に充実している為にもう必要ないのか、もしくは、認識の外にある為に本来必要であってもそう認識されていないのか、施策間でその区別が検討されているのか疑問に思う。また、文章表記についてほとんどが「前期計画は…であるが、…低い（もしくは高い）状況となっている。」としている。9ページであれば、教師の認識不足であるというのが暗に読み取れるが、もしかするとそうではないかもしれない。アンケートは1つのエビデンスではあるが、その結果を別の評価と重ねたときの持ち方が難しく、文言が独り歩きする。その辺りを見直して頂きたい。そもそも、項目名に「アンケート結果等からの」という表記を入れるとアンケート結果の要素が強くなってしまふ。それ以外の研修内容や実践結果等も丁寧に掘り起こしてくださっているので、項目名はシンプルに「考察」でよいのではないか。もしくは、いっそ考察部分を省いてしまった方が誤解を生まず、単年度評価とも合わせて分かりやすいのではないか。また、施策のねらいの文章の語尾は統一すべき。体言止めの表現の方が教育ビジョンに合っているかもしれない。次に、評価入力フォームについて、各学校や学級独自の自由項目や、良さや取組みを伝えられるような自由記述を加えた方が良いという意見があったことを紹介しておく。表現について気になった点を挙げると、子どもの視点からの到達度評価という表現は馴染みづらい。学力であれば1つの方向に向かって学習の蓄積により到達するという意味で到達度と言えるが、この評価は子どもの態度という側面を見ており、行動頻度は実質的に現状評価ということになる。蓄積によって子どもの態度が変化すればよいのだが、現実的にそれは難しく、従来使われている到達度という表現が適切かは検討の余地がある。また、測定目標という言葉もあまり使われなと思う。評価測定という言葉はあるが、測定のための目標はないので、達成目標という表現の方が明確かもしれない。

畑中委員☞ 規範意識については、家庭の関わりや家庭教育の重要性を改めて認識している。保護者自体が地域活動に参加する機会が減っていることもあり、親同士が意識を高めていく必要がある。授業参観でも、授業が始まっているのに親同士で話をしていたり写真を撮ったりと、保護者としての姿勢、態度も大切だと常々感じている。熱心な保護者も多いので、教育ビジョンや施策評価を実施していることをもっと保護者に伝え、特に道徳教育といったところにも家庭が積極的に関わっていかねばならないと感じている。自分の子どもに学ぶ気持ちを持たせて学校に送

り出すことも必要だと思っている。教員の資質・能力向上については、忙しさによって教員が本来持っている実力を発揮し切れていないと言う保護者もたくさんいる。教員と子どもが1対1で話をする時間も、教員自身がゆっくり考える時間もないのではという指摘も保護者から挙がっている。教育センターで研修が行われるということで、予算や施策も改善されれば良いと思う。いじめ問題についても家庭から変わっていかなければならない。PTA連合会も最重要課題として検討していく予定である。

重松座長☞ まだまだご意見をお持ちだとは思いますが、時間の都合により、本日より1週間程度の間メールにてご意見を事務局までお寄せいただき、教育ビジョンの実施、浸透及び評価についてフィードバックによる改善の流れをより強固にしていきたいと考えている。本日は施策のねらいの体裁等の問題や複数年評価のフォーマットについてまだまだご意見はあるだろうが、基本的な形として、複数年度の全体的な変化や改善を意識して進めていく枠組みについては理解して頂けたと思う。複数年度で評価することによって、行政的な施策評価との重複を避け、子ども像を意識して教育ビジョンを実施し、教員の日々の実践とさらなる連携を図ることに生かしていきたい。また、教員にも評価の入力をしてもらうことで、身近な意見を取り入れ、まだ幼稚園の設備が少し整っていないかもしれないが、そういった点も含めての改善に繋がっていくためにも、出来るだけモデル校を設定して実施していただきたい。平成26年度の本実施には各教員に当事者意識を持って頂き、めざす子ども像を意識してもらえよう改善に努めていきたい。

- 【教育総務部参事（教育政策課長事務取扱）】 先ほど議論頂いていた中に挙げた質問について、いくつかお答えして終わりの挨拶とさせて頂く。アンケートの自由記述の結果についてはまた後程まとめてホームページに掲載する。このアンケートの活用方法としては、集計したものを各課に配布し、各施策へ活用して頂くようにしている。複数年評価の施策のねらいと子ども像の欄については、平成26年度の後期計画から新しい様式で施策評価をしていく上での参考として掲載させて頂いた。前期では全く行っていなかった項目であるのでいきなり載せることは無理があったかと反省している。アンケート結果等からの考察についても、今回の参考資料としては必要なかったかもしれないが、各担当課に成果・課題・今後の方向性を考えて頂く際に、教育政策課として取ったアンケートから懇話会に報告した考察を参考までに載せたものである。

また、なぜ追加されたのかというのは、先ほど説明した通り、奈良市の教育ビジョンは学校教育に特化したものとしてスタートし、めざす子ども像も設定されているが、どこまで到達しているのか見えない評価になっている。少しでも見えるようにする為に、教員に協力して頂くことで学校現場に教育ビジョンが浸透していくように、施策と子ども像のつながり、そして子ども像に向けて施策がどうあるべきかというねらいを検討していくという意味で今回の資料に加えさせて頂いた。評価入力フォームについてはまだ試案の段階。幼小中高が全てこれに当てはまるとは限らず、今回は小中学校をベースとした顕著に見られる行動例を準備会にて検討した。項目を校種別に検討しなければならない点については今後の課題と考えている。

(4) その他

- 事務局が、今後のスケジュールを説明。
 - 次回の懇話会は4月頃に平成25年度第1回懇話会を予定している。